

平成 19 年度宮前区区民会議・明日のコミュニティ部会（第 1 回） 摘録

日 時 平成 19 年 5 月 16 日（水）18 時 05 分～20 時 15 分

場 所 宮前区役所 4 階第 2 会議室

出席者 宇賀神部会長、川島委員、鈴木恵子委員、高木委員、三谷委員、目代委員

オブザーバー 小林委員長、永野副委員長、

事務局 田辺企画調整担当主幹、中山主査、東主査、成沢職員

1．開会

事務局から事務連絡

- ・ 区役所人事異動について 原の後任となった田辺企画調整担当主幹から自己紹介
- ・ 情報公開の説明

開会挨拶 宇賀神部会長

- ・ 今晚は。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。本部会は、先月に会議を予定していたのですが、出席人数が少ないということで、まだ部会の方向性が見えていないこともあり、延期させていただき、本日の会議となりました。
- ・ 今日さまざまな方向からの意見が出るかと思うが、忌憚のないところで意見交換していきたい。

2．議事

（1）今後の具体的な審議課題について

事務局 資料 1 の説明

宇賀神部会長 これまでの議論を思い出されたでしょうか？今日はもう少し焦点を絞り込んでいけたらと考えている。部会としての目標を設定できるような形にしていきたい。

小林委員長 先日の企画委員会の討議の結果、今年度は防災について新部会をつくる案がまとまった。この部会の焦点は、災害前と災害発生後に行政からの支援が始まるまでの 3 日間に、区民が自助、共助でできることになるのではないかと。それを踏まえて、本日の討議をしていただければと思う。

三谷委員 防災は真剣に考えなければならない課題だ。災害時に人手が足りない状況がこのままでは起きるだろう。様々な団体との連携、連絡をどうするかまで踏み込んだ形で、地域の防災体制をつくっていかなければならない。人口密度が高いことから見ても重要である。

三谷委員 これまで様々なコミュニティの問題が指摘されてきたが、全国どこにでもある問題なのか、宮前区独自の問題が何かあるのか？問題を解決するための目標設定がまず必要だ。

宇賀神 基本的には「人と人のつながりの強化」が最も鍵となりそうだということで良いか？

一同了承

（2）課題の具体的解決策について

事務局 資料 2・3 の説明

小林委員長 数日前に神奈川新聞に、宮前区の区民会議に対する行政関係者のコメントとして「担い手についてまだ曖昧であり、実現ができるかどうか」という掲載があった。真意はわからないが、関係者でありながら評論的な発言であり、非常に残念だった。きちんと名前も出して欲しかった。

この部会では、コミュニティを形成する「場所」と「人」に絞って議論してゆけると良いと思う。

永野委員 資料 1 及び 2 の視点は良いと思う。他世代交流について、歩いて行けるくらいでの範囲での

コミュニティの形成を考えていたらどうかと思う。

高木委員 担い手育成のしかけづくりが一番の課題になるのではないか。様々な提案を出しても、実践する担い手がいなければ解決は進まない。リーダー的な人間をどうつくっていくのか、それが果たしてこういう場でできるのか、考えていかなければならない。

三谷委員 狂言師野村万斎の「発信者として、常に受信者の立場を意識している」というコメントが印象に残った。私達も受け手の意識を念頭に置きながら議論していかないと、独りよがりになってしまう恐れがある。タウンニュースに先日掲載されていた、区民の様々な意見、アンケート結果は非常に参考になりそうだ。

目代委員 町会を核にコミュニティの目的や方向性を決めてはどうか。例えば防災なら防災と位置づけをして、共通認識の下で参加できるようにすれば、町会への参加度や見方も変わってくるのではないか。今は町会に入っても実感がない。防災は危機感から共通認識が持ちやすいテーマであり、世代交流も活性化できそうだ。

宇賀神部会長 やはり「ただ、コミュニティをやろう」というのではなく、防災など、何かを題材、テーマとして用いていくことが必要だ。

自治会に長く関わり、自治会長を務めて 11 年目になるが、組織的に硬直化しており、新しいやり方を受け入れにくい保守的な傾向が強い。

小林委員長 コミュニティ形成について、宮前区には鈴木委員という良い見本がある。このネットワークを、できる区内に広げていき、点を増やし、将来的に線、面につないでいく。防災の他、これまで議論してきた高齢者福祉、子育て支援をうまくテーマにして進めていければ良い。

鈴木委員 区民会議は行政と区民が協働でやっていく場という位置づけだが、行政が入ると動きが遅くなってしまうことがある。行政批判をするつもりは無いが、住民が思っていることに、スピーディに対応するには区民が自分達でどんどん動くことが必要なことがある。

小林委員長 行政は場所や資金の提供など、できることだけでも、すばやくやってもらえると随分違う。担い手がどれだけ希望を持って活動できるかが重要だ。

宇賀神部会長 既存の組織を変えていくのは時間もかかる。それよりも既存の組織をつなぐネットワーク化を考えていけば良いのではないか。例えば自治会は若い人の参加がなかなか無い一方、PTA では親父の会が楽しみながら活動していて人気があり、若い父親の参加がある。しかし、親父の会は、子どもが卒業すると親も卒業してしまう。町会と親父の会が連携できれば、お互いがステップアップしていけるのではないか。

三谷委員 この部会の方向性・目的について確認したい。他部会より時間をかけて、抽象的な議論をしているが、作業部会としての部分はないのか？全体を踏まえたスケジュール計画も必要だ。

宇賀神部会長 ある程度今年度の任期中に部会としての結論は出していかなければならない。作業部会として議論をまとめ、提案を発信していくことも今後は必要となってくるだろう。

永野委員 宮前区の将来像と、コミュニティをどう構築するかという二つの議論を混同してはいけない。

小林委員長 ただ提案だけでも、なかなか受け入れてはもらえないだろう。孤独死の問題など、今コミュニティを充実させていかないと、今後さらに悪化してしまう問題もある。なんとかしたい。

宇賀神部会長 総論は総論として描きつつも、具体的な身近なテーマを絞り込んでいきたい。

高木委員 宮前区の財産をうまく使ったコミュニティづくりも必要だ。平瀬川周辺の史跡などを歩く、平瀬川ウォークが 3 月から始まったが、タウンニュースでも紹介され、毎回 70 人、内 30 人くらいは新規の参加があり、盛況だ。

永野委員 宮前区の観光協会をつくろうという話も以前から出ているが、毎日のコミュニティの中で、隣の人にどう声をかけていくかという部分が切羽詰っている。

高木委員 担い手をどうしたらいいか。鈴木委員が 100 人いたら楽なのだが、、、

鈴木委員 担い手育成では私たちも苦労している。「世話焼きさん」を探すことが重要だ。また人を集めるには、福祉の問題だけをやっていただけではだめだ。

野川地区の中では、神社のグループやお寺の代表委員の方々、趣味のグループの方々にもダイヤモンドクラブをやっていただいている。様々なグループや人に関わってもらい、他方面からクラブをつくり、それが大きなまとまりになっていく。手をつなぎやすく、多様な世代の人が見え、一つの分野や趣味に偏ることも無い、良い手法だと思っている。

三谷委員 箱物などのハード整備で解決することは至難の技だ。知恵や情報など、ソフト整備でしか解決できないのではないかと。それが明日のコミュニティ。いかに知恵を出し合うかだ。

宇賀神部会長 全ての問題に一度に取り組むのは難しい。身近なテーマで絞り込んでいく必要がある。

三谷委員 「新旧住民」と言うがどこで区別されるのか？言葉としてあまり使わないほうがいいのではないかと。公団ができたのが 40 年前で、ほとんどは戦後の新住民のはずだ。

永野委員 町会組織などの上で特に顕著に現れている。新しい人が自治会に入り、何かをやらう、言おうとしても受け入れられにくい土壌がある。新住民は地域コミュニティに入れないので、テーマコミュニティに入る。そういうことが確かにある。

小林委員長 宮前区に住んで 35 年になるが私も新住民。苗字でわかる。旧住民は親族でネットワークを作っている。

高木委員 神社の組織や、祭事などの文化・伝統を継承しているのは旧住民の人達だ。新住民は農協でも準会員にはなれるが、正会員になれない。

三谷委員 旧住民の人達は「自分たちは違うんだ」という意識をもっている。世代が代わっても根強いものがあり、融和には相当な年数がかかるだろう。

小林委員長 婿さんで来たら、死ぬまで婿さんだ。そう簡単に変えられることではない。

目代委員 私は地の嫁だが、他の新住民と比べると比較的意見を聞いてもらえることをすごく感じる。

三谷委員 新旧住民の問題は宮前区最大の問題なのか？

高木委員 それほど深刻な断絶ではない。ただ、何かをやらうとする際に頭に入れておくとやりやすくなる知識としては必要だろう。

三谷委員 お互いにどこか遠慮がある程度だ。敵対視や差別などはない。

小林委員長 最大の問題ではないが、頭に入れておくべき問題。しかし、メスを入れるのは難しい。

永野委員 町会組織を活性化させるといっても、新住民は具体的な提案をなかなか出せていない。一方旧住民は自分たちはこれだけやっている、守ってきているという自負があり、これ以上忙しくしたり、何かを新しくやるつもりはない。その辺の認識の差、話し合いがうまくいっていない地域が多い。

小林委員長 担い手は「ここに優秀な人がいるから」とやってもらおうと思っても、うまくいかない。地域の伝統や特性を踏まえて、昔からの地元の体勢を立てながら、動かしていく必要がある。

目代委員 私の地域の防災組織は、以前は亡くなっていた人の名前が名簿に載っていたような状態だったが、2 年前に地域の組みなおしを行った。小学校の親父会が避難した際の訓練を兼ねたキャンプを行うようになり、町会にも声をかける話が出てくるなど広がってきている。

鈴木委員 馬絹、野川地域では川崎市内でも 1,2 を争うほど大きな地域である。約 2 万 4 千人ほどの人口があり、2 町会、3 自治会が集まって野川町を形成しているが、コミュニティとしては大きすぎる

面がある。今年度は人つなぎの防災マップづくりに取り組むが、まず野川台自治会（約1,100世帯）だけでやってみようという話になっている。新住民が多い地域で、6月から毎月2回ほどの作業で行なっていく予定だ。防災から世代交流などにもつながるモデル事例になれば良い。

高木委員 隣の自治会が今、何をやっているかなどの情報が、互いにうまく入ってくるようになると良い。それがネットワークだと思う。

永野委員 新しく組織つくるというよりは、既存の組織を重ねていくという発想が必要だ。町会組織の力を利用しながら、いかにネットワークを築いていくか。

三谷委員 野川地区ではPTAの活動も強化されてきている。団体間の連絡をしっかりとやらないと。逆に齟齬ができてくる恐れもある。防災コミュニティにしても、まず共通認識を持つことが重要だ。

永野委員 今、こども安全安心協議会という組織が小学校区単位で見守り体制づくりを目指している。学校ごとに温度差がすごくあるが、うまくいっている2,3地域では地域と学校がうまく連携・協力しており、地元の商店が登下校の時間に合わせて道路の清掃を行ったり、老人会が散歩を兼ねて見守りを行ったりしている。一方、PTAも地域も既にそれぞれ一生懸命活動をしているから、新しい組織は必要無いと、様子を伺っているちいきもある。

目代委員 今は防犯だけであるこども安全安心協議会に、防災などの新たなテーマを入れていくことができれば、様々な団体が関わっているので、問題意識も一気に高まり良いのではないか。

永野委員 校長会、町会長の集まりで、まず区から話しをする必要があると思う。町会と学校の間での話しがうまく進めば良い。

最近の母親は自分の子を自分で守るということに意識が薄い。家の外は行政や地域が守ってくれと考えている傾向がある。お互いの連絡先もあまり教え合わない。意識のギャップが埋められないまま、一緒にやろうよと呼びかけるだけでは、なかなかうまくいかないだろう。

目代委員 意識付けの問題がかなりある。地区懇談会もこれまでの参加は5人程度だったが、母親たちに「地震が起こった時にどうするの？」と細かく呼びかけたら、25人に参加が増えた。

宇賀神部会長 様々な組織が既に地域にはできている。地域単位でそれらの組織のネットワークをやっていく。地域単位としては小学校区が良いと思う。

目代委員 災害に対する危機感、何かしなければならぬという意識はかなり共通してあると思う。上手に呼びかければうまく集まれるのではないか。

三谷委員 組織の高齢化も見られる中、ピラミッド型ではなく、フラットな組織がより受け入れられやすいのではないか。

宇賀神部会長 自治会関係者には、自治会が一番偉いというような意識がどこかにある。これまでに自治会と他の組織がフラットな形で集まったことはこれまでほとんど無いのではないか。

高木委員 呼びかける際に、まず自治会長に話してということになりがちだ。個別に声をかけて集める形にしないと、なかなかフラットな組織にならないのではないか。

小林委員長 地域の単位としては、私も小学校区が良いと思う。人材としては、PTAの会長経験者にうまく活躍してもらうことはできないか。

永野委員 上の人におまかせという農村型のコミュニティに慣れていて、欧米型の主張しあう広場型のコミュニティには急にはついてゆけないだろう。最終的にはフラットなネットワークを目指すにしても、動かし始める際には、町会組織等をうまく立てながらつくっていくことも必要だ。

三谷委員 若い世代は企業でフラットな組織運営の訓練を受けている人も多いのではないか。

小林委員長 横浜市では小学校区単位で子育て支援の拠点をつくるということで議会でも答弁があっ

たが、宮前区でも小学校区単位でコミュニティの形成を目指すということを宣言しても良いのではないかと。

事務局（田辺） やはりいきなり全域ということは難しいだろう。まずどこかモデル地域を1箇所設置して取り組むということになるのではないかと。

高木委員 その地域の女性にいかに活躍してもらってもキーポイントになりそうだ。地域のことを一番わかっているのは女性だ。

事務局（中山） 今年度は新総合計画の最終年にあたり、来年度からの3ヵ年の計画の策定作業に今年度から入る。子ども安心安全協議会を小学校単位で設置しようというのは宮前区だけのことで、区長の考え、思いも入っている宮前区の特徴である。安全安心協議会から、テーマを広げてコミュニティづくり、宮前区の特長を活かしたまちづくりにも取り組みたいという考え方も区の中にある。

また、区民会議で出された提案や意見等も新しい計画にどんどん盛り込んでいきたい意向が市にもある。

宇賀神部会長 行政と思いも一致するようで、大変良いのではないかと。

事務局（田辺） 平小学校の子ども安心安全協議会に先日参加する機会があった。活動が非常に盛んで地域の様々な方々や組織が総出で、登下校を見守る運動が始まっている。今は子どもにテーマが特化しているが、少しずつでも広げて、より良い組織になっていける可能性はあると感じた。

目代委員 町会も関わっているので、うまくいけば良い。

事務局（田辺） 見守りをしながら、まず顔見知りになることにも力を入れている。見守りのポイントを何十箇所か作り、そこで会った人同士は声を掛け合って顔見知りになろうと呼びかけている。

三谷委員 「宮前区のコミュニティゾーンは小学校単位から」など、アドバルーン、のろしのようなキャッチフレーズをまずバーンとぶち上げてはどうか。

高木委員 インパクトを与えることは非常に良い。

鈴木委員 私たちの活動もハツタリから始まることも多い。まず構想をぶち上げて、そこにうまくお金がついてくれば、みんな必死でやる。

目代委員 地域の代表たちが話し合える場を持つ、持ちたいという意識はかなり高まってきている。

永野委員 地域教育会議という町会なども入った中学校区単位の組織もあるが、温度差がすごくあり、積極的に活動している地域と年間行事をこなすだけの地域と二極化してきている。

目代委員 中学校区は広すぎる。小学校区単位であればある程度顔が見え、具体的に投げかけやすい。

小林委員長 地域教育会議はお金が少ないから、活動ができない面もある。

三谷委員 知恵を出し合って、温度差をなくしていくことが必要だ。

宇賀神部会長 それぞれの組織が意識はあっても、どうコンタクトをとっていいかわからない状況にあるのではないかと。小学校区単位で狙いがわかりやすくなれば、様々な団体も動きやすくなるだろう。

高木委員 団体毎に抱える課題が互いに見えるようになると良い。

事務局（まとめ）

- ・ 「地域のコミュニティ単位をどのように設定するか」という点では、小学校区単位を目指したい、中学校区単位では広すぎるということで意見が一致した。
- ・ 「担い手の核をどうするか」という点では、町会等の既存の組織を変えていくのは難しく、時間がかかるだろうという意見があり、また新しい組織をつくるよりは既存組織を重ねていく、ネットワーク化してく方向が良さそうだった。
- ・ 小学校区単位で組織化が行なわれている安心安全協議会は、学校ごとに温度差もあるが、様々な組

織が関わっており、今後核となれる可能性のある組織という意見が出た。

- ・ 様々な組織の連携を進めていく上では、複数のテーマに取り組んでいくことも重要である。
- ・ （今後は安心安全協議会の現状など、地域の情報収集を行いながら、より具体的な検討に入れると良い。）
- ・ （区民会議のメンバーだけの閉じた議論だけでなく、外からの声や現場の方を声を聞くような機会も設定できると良いのではないか。）

3 . その他

委員の任期について

企画部会の審議結果として、現委員の任期を行政の年度の区切りに合わせて平成 20 年 3 月に辞任と言う形で委員の交代を行なうという案が出され、一同概ね同意する意向が確認された。